

平成二十六年二月十七日

東北地方太平洋沖地震の影響、未だ各所に残る。余、遠き神奈川の地にありて、些事なれどもその餘波を日々感ず。

通勤に使用する電車、東京の地下鐵と相互乗入れし、都心の我職場に近き驛まで直行す。朝の遅延常態となりぬれば乗車時間は一時間を超ゆ。急行電車を避け、列に並び、一列車遣り過ぎし、席を得ばこの一時間、余にとり貴重なる讀書時間となる。

然るに、席を選ぶの要生ず。電車は始め地上を走り、多摩川を過ぎて都内に入れば地下に潜る。地下にては車内の電燈によりて書を読む。曾ては照明行届き、車内一様に明るかりけり。

されど今、電車の天井を見るに、螢光燈外されて電燈設置ス。ペース剥出しなる箇所多き、何人をも驚かさずにはおかし。余が算ふるに、凡そ半数の電球外されてあり。席によりてはいかにも暗く、眼を疲勞せしめ讀書繼續これ甚だ難儀なり。

余は明るき席を得むが爲、電車來りてその扉開くや否や天井を見、點燈せる電球を搜す。空席獲得競争激しくして、余が上を見やるうちに後續の乗客先を越し、氣附けばいづれの席も埋る「虻蜂採らず」の愚を犯すこと再々ならず。

幸ひにして照明至近の席を得てもなほ萬全とは言ひ難し。照明は窓を背にして坐す余が頭上よりもやや車内内側に寄る天井にあり。電車都心に近付くにつれ混雑し、余の前に人が立ち、それ、大男なる時は、その身體、余が手許を陰にして折角の良席を臺無しにす。かかる時、その人に小さき人と立ち位置を變更するやう申入れたき心地すれど、未だ試みたることなし。

余が頭上なる物置棚に置きたる鞆その他の荷物も亦陰を生む。されど棚の利用はなるべく避けられたしとの車内アナウンスを要望するは身勝手に過ぐるごと、余も知る。

立ちて読みものする人も迷惑の種なり。片手につり皮を握り、他の手に本を開くは害なし。問題は新聞なり。周圍を氣遣ふ人は折疊みて讀めども、時に両手に廣げ持ちて讀む人あり。これ天井よりの照明を遮り、余が手許を著しく暗くす。特に團塊世代以上の人、新聞を目に近付けて讀むを難儀として視認距離確保せむがため腕を伸す。即ち、彼の新聞、坐して下を向く我顔に觸れむばかりに近付き、陰の面積を更に大きくす。

大地震直後、電力不足深刻と全國に喧傳され、計畫停電すらなされたるは記憶に新し。鐵道會社、節約に協力して運行本数を間引き、驛、車内の照度を減じたるは悪しきことにあらず。生活の不便あるとも電力節約優先なること國民の多く納得せり。

但し、電力不足心配の議論なほ續くと雖も、今、電力を節約して客に不便を強ふる例、他に多からず。東急電鐵、速かに螢光燈設置本数を舊に復されたし。